

論文の和文要旨

論文題目	仏領インドシナにおける植民地文学 ベトナム語作家カイ・フン（自力文団）の後期テキストを中心に
氏名	田中あき

本論では、仏領インドシナの一部であったベトナム・ハノイで、1930-1940年代に活躍した文学グループ「自力文団」(Tự lực văn đoàn)の主要メンバー、カイ・フン(Khái Hưng, 1897-1947 / 本名：チャン・カイン・ズー, Trần Khánh Giur)の後期文学作品(1938-1946)を取り上げ、「植民地文学」という観点から論考を行う。本論で用いる「植民地文学」とは、フランスや日本といった海外勢力のベトナム支配における、植民者の様相や植民地主義の構造そしてその暴力性、独立闘争に向けたナショナリズムの萌芽と高揚、世界大戦期の植民地ベトナムにおける苦悶と懸念、さらに上記海外勢力がベトナムに遺していった負の遺産など、植民地主義の実態が、顕著或いはセンシティブに描き出された文学を意味する。カイ・フンが政治にかかわり始めた後の後期文学には、親に定められた結婚や封建的家族制度にまつわるテーマが主に扱われた前半期の作品にはほとんど見られなかった、世界情勢や他国の動向、自国の独立闘争に伴うナショナリズムの形成過程およびそれに伴う苦難や危惧が、意識的或いは無意識的に埋め込まれた作品が散見される。そのことが、筆者が後期文学作品に目を向ける理由である。

研究対象となる時代は、フランス植民地期（具体的には 1938 年以降）から日仏共同支配期(1941-1945)、そして独立宣言(1945)を経て、脱植民地化に向けたインドシナ戦争（対仏戦争）勃発前夜(1946)までであり、政治的・歴史的、さらには文化的・社会的に非常に複雑な時代である。なお、1945年のベトナム民主共和国の「独立」は国際社会に承認されず、ついに抗仏戦争勃発に至ったが、本論では、このような植民地がしばしば辿る宿命としての、植民地主義の継続性および植民地支配による負の遺産までを視野に入れ、本論で扱うカイ・フンの文学作品を一貫して「植民地文学」として扱っていく。

ちなみに、自力文団とは、「西洋の学問=近代的な教育=新学」を身につけた知識人の集まりとされ、旧習を打破し、彼らの文学活動によって「我」と「個」が前景化したとされる。本論は、こうした単純化された評価を、自力文団のリーダー：ニャット・リン (Nhật Linh, 1906-1963 / 本名：グエン・トゥオン・タム, Nguyễn Tường Tam) よりも十歳年上で、「東洋の学問=漢籍古典=旧学」の終わりど「新学」の始まりどが重なり合った地点に位置した、カイ・フンに注目することで再考を試みると同時に、ベトナムにおける植民地近代、謂わば「圧縮された近代」の複雑な時空間において育まれた文学の営為を考察していく。

本研究では、植民地文学研究およびベトナム地域研究の両面から、カイ・フンの文学に込められた彼の思想、さらに政治的態度にアプローチしていくことで、カイ・フンのテキストが生み出された歴史状況、そして特定の態度および感情、さらにレトリックの構造が、そのテキストの文脈を作り上げた歴史的・社会的公式とどのように絡み合っているか明らかになる。東西そして新旧の融合を体現するかのよう人物であり^{アレゴリー}寓意を巧みに用いたカイ・フンの文学、とりわけ支配者による言論統制が取り扱われた時期(1945-1946)の彼の文学は、植民地だけでなく「ポスト=植民地」が抱える状況の複雑さを窺い知る興味深い材料となるだろう。

以下は、二部八章から成る本論の要約である。

第一部では、自力文団とカイ・フンの諸活動について論考を行なった。

第一章では、自力文団が、^{クォックグー}国語を豊かにしていこうとする意志を有し、またこれまでの評価とは異なり、ベトナムの伝統的倫理を高く評価していたことが明らかになった。さらに、ニャット・リンとカイ・フンが日本の軍用機で、広東と台湾に渡っていたことが判明し、親日派として仏植民地当局に投獄された直接的要因を探り当てて至った。

第二章では、カイ・フンに対する批評のあり方を、1930年代から2020年までを見渡すかたちで、南北分断前、分断後の北部および南部、ベトナム戦争終結後、ドイモイ後に分けて丹念に追った。その結果、「カイ・フン＝ロマン主義小説＝ブルジョアジー＝頹廢＝反動」の公式の成り立ちおよびその継続には、戦争に翻弄させられた国家の方針が強く関わっていることが判明した。

第三章では、カイ・フンの文学が、異種混淆、多種多様性、脱領域の見識を基盤として生まれ出たこと、同じく、カイ・フンの異種混淆的言語環境・言語感覚が、^{クォックグー}国語を豊かにしたことが明らかになった。政治情勢が変転する複雑な時代において、流動的かつ柔軟な姿勢を保ち続けたカイ・フンの思想には、仏教が基底に横たわっており、非暴力・非戦を理想に据えていたことが見えてきた。

第二部では、カイ・フンの後期作品のなかから、とりわけ植民地の構造やその暴力性が映し出された作品を取り上げ、分析を行なった。

第四章では、グエン・ホン著『幼き日々』およびカイ・フン著『ハイン』を材料に、第二章で論じた、現体制下の「リアリズム文学／ロマン主義文学」の二項対立的文学批評を覆す議論を補完した。なお、カイ・フンの『ハイン』においては、自己像そしてナショナル・アイデンティティというものが幻想であることが不確実性ととも暗示され、フランス社会に漠然とした憧憬を抱き、国民国家への羨望を覚えるベトナムの人々に、幻影からの覚醒を促したと解釈できる「読み」の可能性を呈示した。

第五章では、植民地という監獄のもと、圧政に晒された空間において書かれた『清徳』を、謎解きの眼差しで眺めることで、様々な仕掛けがなされていることが明らかになった。『清徳』には、ベトナムの伝統文化を知る者にしか分からない符丁を駆使しつつ隠し絵的手法によって、当時のベトナムを巡る各国の動きおよび未来予想図が埋め込まれていた。『清徳』とは、二重の読み／多層的な読みの可能性に満ちた作品であることが判明し、自力文団の閉塞感が表れ出た作品といった、これまでの評価を覆す結果となった。

第六章では、日仏共同支配期の保護観察下で児童向けに書かれた『道士』を取り上げた。保護観察下という自由な出版が禁じられた環境において、童話という隠れ蓑を効果的に用い、世界消滅を目前にした危機感とともに描かれた文章を分析することで、個人崇拜および全体主義の危険性に警鐘を鳴らす作者のメッセージを読み取ることができた。こうした言論行為は、大戦期における知識人の使命としての世界共通の表現行為であったことが明らかになった。

第七章では、カイ・フンが表象した植民地主義および植民者の分析を試みた。カイ・フンの文学においては、植民地主義下の植民者は、完全なる悪として描かれず、一人の人間としての植民者の私的な「生」に目を向けることで、植民者も植民政策のシステム下に置かれた一歯車であるという、敵と味方の二分法では説明し切れない、植民地における重層的支配構造が明らかになった。

第八章では、戯曲「月光の下で」の分析と検証を通して、「内戦」という、従来看過されがちであった新たな史実が掘り起こされた。ジャーナリズムの責務として「内戦」を伝える文章に込められた作者のメッセージは、戯曲を掲載した機関誌の検閲によって削除された。そのことは、カイ・フンの言論活動は、諸政党のプロパガンダには決してなり得ず、より良き未来に向けて、いかなる団体・陣営に対しても批判的精神を発揮し続けたことを裏付けて

いる。カイ・フンは政治活動家ではなく、あくまで文学者であったことが、最後に改めて確認された。

カイ・フンは、越漢洋の知見を備えた作家、古き越漢の伝統と趣味、そして欧州の学問趣味とを一身に備えた。中国文化・フランス文化・ベトナム文化とともに、それぞれの言語に囲まれた異種混淆の空間に身を置いて、カイ・フンは思考を重ねた。こうした雑種の経験から生ずる思考および言論は、時に矛盾を抱えながらも、モノローグ或いは一義的ではあり得ず、ダイアログかつ多義的となり、いずれかを選択し一心に邁進することへの不信感・懐疑心を生じさせ、それが作品の多層性・重層性につながった。

また、現地語を用いる被支配者の作家が、目まぐるしく政体が転変する複雑な時代に、いかに自身の作品を合法的に発表し、後世に残していくかを常に考えながら、今後を見越して、柔軟かつ流動的態度を保つ必要に迫られていたことも、カイ・フンの後期文学の特徴であると言えよう。

カイ・フンは、非戦の意志以外のあらゆる面で、両義的であったと言える。カイ・フンは、新学かつ旧学の知識人であり、儒教的家族制度の負の面を呈示しつつ儒教の礼儀を重んじた。国を愛する人間でありながら民族主義に対して批判の眼差しを向け、反共とされながらも共産側との接触・連携を探り求めた。思想的無自性、加えて文化的異種混淆の土壌に生きたカイ・フンはまた、コスモポリタンでもあった。あらゆる新しい物事に心を開き、文化、宗教、政治的偏見から自由な人間であったカイ・フンは、それゆえに、戦争の道へと導く危険性を孕んだナショナル・アイデンティティへの固執が強まる空気のなかでも、自由無碍の風を、文学作品を通して送り続けた。

カイ・フンは、極めて〈才情〉豊かな人間であった。カイ・フンはその〈才情〉を文学に、そして後世のより良き未来に向けて注ぎ込んだ。それゆえ、彼は風塵の人生に足を踏み入れた。文学に杵が設けられ、新聞が廃刊に追いやられ、投獄され、文学が時代遅れとされるなかでも、懸命に筆を握り続け、生きているかぎり表現することを止めることはなかった。本論では、こうしたカイ・フンの生涯と後期作品に、さまざまな角度から新たな光をあてて、既成の解釈に異論を唱え、近現代のベトナム文学、ひいては植民地文学としてのカイ・フン文学の位置付けをし直した。